
修羅と恋姫 ～月夜語り～

ヒロ18

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

修羅と恋姫 ～月夜語り～

【Nコード】

N12370

【作者名】

ヒロ18

【あらすじ】

自らの仕えるべき主を求め旅する少女と、流星とともにこの世界を訪れた“天の御使い”が出会ったとき、新たな外史が幕を開ける・

SS初投稿となる本作は『真・恋姫＋無双』モノですが、主人公の設定を含めオリジナルの登場人物など原作にない要素が多く含まれていますのでご注意ください。

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

00 序（前書き）

携帯などで表示されない可能性のある文字に関して、形の近い別の漢字を充てている場合がありますのでご注意ください。

例…桂花の姓名である「じゅんいく」について、本来の「いく」は常用漢字外ということで表示されない可能性があるため、本来「或」は「いく」とは読みませんが字面的な雰囲気優先して「荀或」と表記しています。

00 序

長い長い道程を来た。

流れた多くの血が、落ちた涙が、この指の隙間をこぼれていったいくつもの命が重なり合いできたその道を、私はここまでまっすぐに駆けてきた。

ただ前だけを見て。

その先に、私たちの求める未来があると信じて。

新しい時代の扉はもう目の前にある。

けれど、その扉をくぐる前に、少し昔話をしようと思う。

果てしない空の向こうへと手を伸ばした少女と、少女を導いた流れる雲の話を。

——あの懐かしい日々の物語を。

00 序（後書き）

まだ序章だけではありませんが、楽しんでいただけたなら幸いです。

01 はじまりの流星（前編）

眼前には抜けるような青空がどこまでも高く高く広がっていて、どれほど伸び上がってみても、少女の小さな手はそこには届かなかった。

緋色の翼を広げた見たこともない鳥がゆっくりと滑るように空を渡っていく様を眺めながら、少女は、あいつには自分たち地を這う者の気持ちなんて理解できないのだろうか——などと愚にもつかないことを考えていた。

それは、おそらくお互い様だ。

空の高みを往く鳥の気持ちなど、人間にはきっと一生わからない。

いや、それとも、もしかしたら“彼女”ならば、自分には想像もつかないそこに手が届くのだろうか——。

そうやって、まだ見ぬ主に想いを馳せながら空の向こうを見やることが、少女の最近の日課となっていた。

「……こんな所にいらしたのですか」

聞き覚えのある声に少女は振り向く。

声をかけてきた女は、南皮を出る際に自分に付き従った数少ない者

の一人だった。

ここまでたどり着くまでの間に、ただでさえ少なかった少女の道連れは指折り数えられるまでに減っていた。

「また、空を眺めていらっしゃったのですか」

「……ねえ、あなた、あの鳥がなんだか知ってる？」

女の質問には答えず、少女は、先ほどからまるで何かを待っているかのように、ただ一羽、この村の上空を舞い続けている鳥を指さした。

「さあ、私にはわかりかねます。……あのように鮮やかな赤い翼を持った鳥は、はじめて目にいたしますね」

「……そうよね」

つぶやいて、再び視線を空の彼方へ戻してしまった少女を、女は怪訝そうに見つめる。

「……そんなことよりも。そろそろ食事の準備ができる、と」

「伝えてこいと、あのコに言われたの？」

悪戯っぽく、少女は微笑む。

女もまた困ったように笑い、大げさに肩をすくめて見せた。

「まさか、あのような田舎娘に使われるとは」

女は少女にも聞こえるようにわざとらしくため息をもらしたが、女がここ数日ですっかりその「田舎娘」を気に入ってしまったのは、少女たち一行の間でも知らぬ者のない話だった。

「たしか……許緒、といったわね、あのコ」

「……はい」

「今はまだ無理だけど……きっと戻ってくるわよ。そしてあのコたちの力になってみせる」

——そう、無事に“あの方”に軍師として取り立てられれば。

しかし、そのためにはまだ、乗り越えなければならない障害がいくつもある。

「……とにかく、私はたしかに伝えましたよ。あまり待たせると田舎娘の機嫌が悪くなります、どうぞお早めに……荀或さま^{じゅんごく}」

わかってるわよ、と立ち去る女の背中に返し、少女はようやくその
場を離れた。

緋色の翼は、まだ青空を舞っていた。

02 はじまりの流星（後編）

少女は、姓を荀、名を或、字を文若。

真名を桂花といった。

かつての主である袁紹に、とてもではないが大業を成す事のできる人物ではない——と見切りをつけて南皮を出てからはや一月あまり。

数少ない同行者の一人が病に倒れ、命からがら転がり込んだこの小さな村での滞在も、すでに一週間を過ぎようとしていた。

あと山をひとつ越えさえすれば、目的地である陳留の街にたどり着く。

そこで、自分が仕えるべき真の主が待っている、はずだ。

そう、もうそこまで来ているというのに。

「……どうしたの荀或さま、難しい顔して。ひょっとしておいしくなかった？」

どうやら知らないうちに眉間に深いしわが寄っていたらしい。

不安そうに顔をのぞき込んでくる少女に、桂花は手にした茶碗を取り落としそうになりながら、慌てて首を振った。

「そ、そんなことないわよ？　ちよっと考え事をしてただけ。ごめんね、許緒」

だったらいいんだけど、と無邪気に笑う桃色の髪の少女は、名を許緒という。

この村にたどり着いてから、桂花たちの面倒はほとんど彼女ひとりが見ていたといっても過言ではない。

宿泊先――彼女の家だ――から食事、洗濯の世話まで、あまり桂花たちに近づいてこようとしないう他の村人たちに代わって甲斐甲斐しく働いてくれていた。

そんな余裕など、あるはずがないのに。

村は、決して豊かとはいえない。

昨年から続いているという作物の不作に加え、最近では盗賊による被害も頻発するようになっていくという。

今日が無事に終わったからといって、明日もまた生きていられる保証などどこにもない。

ある村人が吐き捨てるようにそうつぶやいたのを、桂花は忘れられなかった。

そんな状況で、どうして見ず知らずの自分たちのためにここまでしてくれるのか。

疑問を許緒にぶつけたのは滞在三日目のことだったが、そんな桂花に彼女は、困ったときはお互い様だよ、と屈託なく笑った。

桂花が思いつき彼女の頭をなで回すと、許緒はくしゃくしゃになった髪を抱えて頬をふくらませたのだった。

だが、そういつまでも好意に甘えてばかりはいられない。
連れの者の体調も、少しはよくなっている。
どのみちこの村では本格的な治療は望めないのだ。陳留まで行けば
薬もきつと手に入るだろうし、ここは無理をしても……。

桂花が出立を口にしようとしたそのときだった。

不意に、薄黒い影が彼女の上に落ちてきた。

「……な、なに？」

桂花はすぐに、窓から入ってきていた日の光が何かに遮られたのだ
ということに気づいた。

いったい何が――そう思い立ち上がろうとしたとき、耳をつんざく
ような悲鳴が外から聞こえてくる。

「じゅ、荀或さま、外、外！」

見れば、許緒が窓の外を指さし叫んでいる。
慌てて駆け寄り、彼女を押しつけるようにして窓の外をのぞき込む。
そして、桂花は息を呑んだ。

影は、辺り全体を覆っていた。

空には雲一つないはずだった。

だが、“なにか”が太陽を覆い隠し、世界を闇に沈めていたのだ。

「じゅ、苟或さま……」

怯える許緒の手を強く握りながら、桂花は明かりの消えた空を身じろぎもせずに見つめていた。

桂花は以前、“それ”について書かれた書物を読んだことがあった。

それは、天からの警告であると。

大きな戦の気配を憂えた天が、人間たちにそれを伝えるために、世を統べる者——つまり皇帝のことだ——の象徴である太陽を覆い隠してみせるのだと。

——なんなのよ、これからはじまる私の……いえ、私たちの未来に難癖をつけようっていうの。

だが、事態はそれだけではすまなかった。

「……なに……あれ……」

それは、誰のつぶやきだっただろうか。

東の空の向こうから、光を失った空を切り裂くように、青白い光を放つ流星が落ちてきていたのだ。

しかも、あろうことか“それ”は、次第にその姿をはっきりと、大きくしていた。

「ちよっ……なんなのよあれ！　こ、こっちに向かってきてるんじゃないの！？」

「はっ……早く逃げよう！　荀或さま！」

許緒は必死に桂花の袖を引っ張っていたが、動かないとみるや、桂花の腰を引っ掴んで一気に肩へ担ぎ上げた。

——ちよっ……このコ、こんな小さい身体でなんて力……っ！

だが、慌てふためく桂花はもちろん、許緒にも逃げる当てなどない。のちに「王佐の才」と称された天才軍師と、その剛力を虎に例えられた猛将をもってしても、目の前の災禍に抗する術などありはしなかった。

「きゃあああああーっ！！」

桂花と許緒。

二人の悲鳴は、閃光と轟音にかき消された。

歴史は語る。

漢代の末、天下は大いに乱れた。

動乱期をおさめるため、天は流星と共にそれを地に下した、と。

02 はじまりの流星（後編）（後書き）

第一話、二話を公開しました。

楽しんでいただけたなら幸いです。

また、ちょっとしたことでも感想、アドバイスなどいただけると作者は大変喜びます。

03 少女は運命と出会う（前編）

起き上がると同時に軽いめまいを覚え、桂花は思わずその場にへたり込んだ。

慌てて駆け寄ってこようとした女を手で制し、大丈夫よ、と笑って見せる。

「……たぶん、あのコがきつく巻きすぎたせいだと思うのよね」

そういつて、桂花は自分の頭に巻かれたクリーム色の包帯を指さした。

女は黙って桂花の後ろに回ると、慣れない手つきで包帯をほどき始める。どうやら巻き直そうとしてくれているらしい。

「ねえ、私のことはいいからあなたも村の人たちを手伝ってくれば？」

「……これが終わればそういたします」

融通が利かないわね、と桂花は女をにらんでみせたが、女はまったく意に介した風ではない。

桂花は小さく嘆息した。

空は、すでに元の透き通るような青さを取り戻している。

まるで、ただあの流星を迎え入れるためだけに、何者かが太陽を隠してしまっていたかのようにだった。

暗闇に沈んだ空を割って飛来した流星は、村を文字通り“かすめて”、西の広野へ落下したらしい。

その際の衝撃で家々はかなりのダメージを被り、中には屋根を丸ごと引き剥がされた家屋もあるという。

しかし、幸いにも怪我人と呼べるほどの者は――慌てて逃げだそうとしてひっくり返った許緒に抱え上げられたまま、頭から床にダイブする羽目になった桂花をのぞけば――出ていなかった。

その桂花にしても、外傷といえるのは頭にできた切り傷と小さなたんこぶくらいである。

先ほどからどうもめまいがするが、それはおそらく許緒が力まかせにぐるぐる巻きにした包帯のせいだろう。

あまりにもきつく縛られているせいか、女もほどくの苦戦している。

いったいあの小柄な身体のどこにそれほどの力があるのか、ただ感心するしかなかった。

「……で、なんだったの？ さっきの流れ星」

「いや、私におっしゃられましても……とりあえず、星が落ちた先を今調べに行かせてはおりますが」

まもなく何らかの知らせを持って戻るでしょう、と答えながら、女はようやくほどけた包帯の下にあった桂花の傷口を見て目を丸くし

た。

「あの、失礼ですが荀？さま。この程度の傷でしたらこのような大げさな包帯など必要ないかと存じます」

「……あんまり許緒が申し訳なさそうにするから、断れなかったのよ」

だから私の世話など不要なの、とふてくされたようにいって、桂花は自分の頬が赤く染まるのをごまかした。
思わず吹き出しそうになっている女を桂花がとがめようとしたとき、部屋扉を叩く音がする。

「……誰？」

「私です」

扉の向こうにいたのは、女と同じく、南皮から桂花に付き従っている少女であった。

どうやら、流れ星の調査に向かっていたのは彼女らしい。

「……で、どうだったの？」

「はい、流星は西の荒野、ここから10里ほど離れた場所へ落ちたようです。かなりの衝撃だったようで、地面が巨大なすり鉢状にえ

ぐり取られてました。そして、その……」

少女は肝心なところで言いよどむ。

桂花が怪訝そうに首をかしげていると、ややあつて——それでもどこか言い辛そうに、少女は続けた。

「……その、えぐられた穴の底、その中心にですね……見慣れない服装の男が倒れていたんです」

「……男お？」

まさか、流星の落下に巻き込まれたのだろうか。
だとしたら運のない男だ。

「いえ、それがですね、見たところ男はまったくの無傷で……とてもではないですけどあの場所にいたとは思えないんです。で、これは一緒に行った村の人の意見なんですけど」

いいですか、私はそんなわけないと思うんですよ、としつこく念を押してから少女は続ける。

「男はその、流星に乗ってやって来たんじゃないかと。天の国から来た遣いにちがいないとか何とか」

「……はあ？」

桂花は思わず、自分でもわかるくらい間の抜けた声を漏らし、隣の女と顔を見合わせた。

03 少女は運命と出会う（前編）（後書き）

次回、ようやく主人公？である天の御使い登場。
楽しんでいただけたなら幸いです。

・・・あと、ここへの投稿は本作がはじめてなのでよくわからない
のですが、文章の行間とかこんなものでよいのでしょうか？
読みづらいところとかありませんでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1237o/>

修羅と恋姫 ～月夜語り～

2010年10月13日20時00分発行